高安國世
田谷　鋭
前　登志夫

現代短歌大系　第八巻　（全十二巻）

一九七三年四月十五日　第一版第一刷発行

編者　大岡信
　　塚本邦雄
　　中井英夫
©一九七三年
発行者　竹村一

発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話〇三（二九一）三一三一番
振替東京　八四一六〇番

印刷所　第一印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所

0392-739808-2726

現代短歌大系

第8巻　目次

高安國世……003
田谷　鋭……115
前登志夫……223
解説　上田三四二……339

編集協力　齋藤　愼爾
　　篠　　弘
　　正津　　勉
　　富士田元彦

装幀　澁川　育由

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

高安國世

高安國世　略歴

大正2年8月、大阪に生れる。甲南高校理科を経て京都大学独文科卒業。昭和9年、「アララギ」に入会、土屋文明に師事。29年、「塔」を創刊、現在に至る。京都大学教授。現代歌人集会理事長。ドイツ文学会会員。主要著書に歌集『Vorfrühling』(26年)、『眞實』(24年)、『年輪』(27年)、『夜の青葉に』(30年)、『砂の上の卓』(32年)、『北極飛行』(35年)、『街上』(37年)、『虚像の鳩』(43年)、『朝から朝』(47年)の他、評論集『抒情と現實』、『リルケと日本人』、訳書『マルテの手記』、『リルケ詩集』等多数。

高安國世　目次

眞實（完本）――007

抄――075

Vorfrühling（フォアフリューリング）　年輪　夜の青葉に

砂の上の卓　北極飛行　街上　虚像の鳩　朝から朝

高安國世論　野間宏――101

眞實（完本）

目次

一九四五年
敗戰（八首）……一一
霜ふる（八首）……一三
動物園（七首）……一三

一九四六年
冬日抄（十首）……一五
夢の笑（八首）……一四
早春（十七首）……一五
子と共に（八首）……一六
西三河（十一首）……一七
菜園時々（八首）……一八
夜雨（八首）……一九
殘光（五首）……二〇
こほろぎ（四首）……二〇
夏美（十一首）……二〇
鼠（十首）……二三
夕風（五首）……二三
蟬（四首）……二三
嵐のあと（五首）……二三
初秋（五首）……二四
病む夜（八首）……二四
淺葱（五首）……二五
病犬（八首）……二六
奇蹟（十一首）……二六
一つの窓（十首）……二七

一九四七年
季節なき風景（八首）……二八
白きパン（八首）……二九
窓の氷（六首）……二〇
骨（五首）……二一
處女らの中に（五首）……二二
子供部屋（九首）……二三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

干　潟（十一首）……三三
畦　草（七首）……三三
病閒錄（二十五首）……三四
楓の花（五首）……三六
蟻地獄（五首）……三七
薄　命（十一首）……三七
西　日（五首）……三八
曼陀羅華（七首）……三九
藷　苗（五首）……四〇
煩　惱（五首）……四〇
平行線（五首）……四一
醉ふ夜（五首）……四一
貝　殼（八首）……四二
水彩繪具（四首）……四二
ワンピース（八首）……四三
亂れし部屋（八首）……四四
片陰る街（八首）……四四
月　明（八首）……四五
病む妻と（九首）……四六
校內圖書館（六首）……四七
家常茶飯（四十二首）……四七
理　論（四首）……五一
十　年（十首）……五一
新しき年を待ちつつ（八首）五二

一九四八年

友二人（六首）……五三
夜の匂ひ（十一首）……五四
街の鷗（三首）……五五
兄　妹（五首）……五五
再　會（七首）……五六
丘の燈（五首）……五六
夜　風（十首）……五七
芦屋にて（五首）……五八
憂（五首）……五八
太龍寺山上（九首）……五九
若き友A又B（五首）……六〇
ミシンの音（七首）……六〇

栗の花（七首）……六一
決　斷（七首）……六一
組　合（六首）……六二
再び東京にて（六首）……六三
暑　中（五首）……六三
山　陰（五首）……六四
小　心（六首）……六四
推　移（八首）……六五
教　會（九首）……六六
ひそかなる死（五首）……六六
蟷　螂（六首）……六七
誠實の聲（八首）……六八
グリンカ（一首）……六八
水の上（二首）……六八
卷末小記……七〇

一九四五年

敗戰

くまもなく國のみじめの露はれてつひに清らなる命戀しき
みじめなる日日といふとも學びたき物多くして時を惜しみつ
限りなくみじめなるをば重ねつつ湧きくる力たのめりひとり
アカシヤの枝搖れをりて音もなき窓にむかひて暫く居たる
息苦しく我のめざめし蒲團には夜半出でし月の光さしたり
まんだらげの煙こもらふ一ときを我が王國と今にかなしむ
幾日も掃かざるらしき父母の部屋掃き出だしひとり晝寢す
假住みの部屋とりみだし居給ふをいたき心に今日も偲びつ

霜ふる

しづかなる光滿ちくる我が庭のひともと縱の影の中に居り
在りありて我の戀ふべく幹高き松四五本の寄りて立つ丘
稀まれに來し父母と思へども物乏しきは心疲るる
父母と並びて眠る寢ね際に幼き旅の日を少し言ふ
蕪の葉のいたく亂れし朝霜を見つつし居るに心はずみ來
霜しろく凍りつきたる蕪の葉を折り取りたれど手ごたへも無く
霜解くる蕪の葉見れば誘はるる如くに我の畑に下りゆく
ひととせは過ぎたるかなと冷やけき土掬ひつつ麥に寄せやる

動物園

聲あげて子の走り入る園のうち遠き噴井の水散りてをり
さむざむと時雨ながらふる園ひろくけだもの吼ゆる方もあらぬか

時雨の雨散りくる鷲の檻の前白木蓮の蕾ふふみぬ

大鷲の兩趾に肉をおさへつつ啖ふを見れば近附く一羽

肉撒きて人去れば來て肉くらふ大鷲ふたつ爭ふことなし

獣ゐぬ獣の檻を見つつ行くに豚の仔五つ六つ餌に寄りてをり

肉きれをついばみ居りしうみねこか小さき鋭聲ききて去るかな

一九四六年

冬日抄

夜よひに並びて眠る子なれども夢のうちにてその子と遊ぶ

安らぎし日の四週間はありやなしと一生かへりみてゲーテ言ひにき

松並木片照る幹はしろじろと雪のこりつつ見ゆるさびしさ

さしあたり爲すことのなき寂しさは妻の立居の音ききてをり

山際に散りなだりたる多落葉久しきものを相見るごとし
深きしげり出でて仰ぎぬ木幡山(こはたやま)いま夕光(ゆうかげ)の淡きみどりを
綠あはき二つの峰の並びたる木幡の山を今日のよすがに
朝床に目をさましゐる幼兒を薄目あきつつ我は見てをり
三合の麥碾き終へて我は見つ南に近き眞多の日ざし
濕り深く掘り起したる多土に綠あざやかに居る蟲のあり

夢の笑

多庭に妻が見出でしヒヤシンス靑き芽簇(むら)がる一鉢のうちに
色となき空ひといろに見えてをり風凪ぎはてし夕の窓に
連れ立てば物問ひやまぬ幼子にいら立つ今日の疲れゐるらし
よひよひに月ある二階に上り來て子らの寢息のきこゆるあはれ
腹抱へ笑ひし友の聲音(こわね)さへありありとして夜半に目をあく

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com